

ひらかわ あらた

平川 新

宮城県慶長使節船ミュージアム 伊達政宗の黒船／サン・ファン館 館長

未来への航路

伊達ガレオン

使節船を復元する手がかりの一つは、ローマで描かれた支倉常長肖像画の中のガレオン船にありました。これでフォルム(形状)は想定できますが、寸法まではわかりません。ところが日本の記録に船の仕様が残されていました。伊達政宗の祐筆(書記官)真山正兵衛が書いた「真山記」です。これはのちに仙台藩の正史「伊達治家記録」に収録されています。

す(顔写真)。宝田さんは16〜17世紀のヨーロッパの40隻の帆船データを徹底的に調べ、「真山記」の数字に対応する500ト級の船体規模を割り出しました。その結果、船体長47呎、船幅11呎、メインマスト32呎となったのです。図1は宝田氏が作成した復元船の設計図です。今はサン・ファン館のドック棟に展示しています。

ふくらんでいるのに対して、イギリス型はふくらみが滑らかでスリムな印象です。なぜという違いがあるのかといえば、スペイン型は植民地に新大陸から大量の金銀や財宝を本国へ運ぶために船の腹を大きく丸く膨らませて、たくさんの荷物を積み込むようにしています。ところがイギリス型はスペインの財宝船を襲撃したり、機動力で圧倒したりすることを目指したため、荷物の積載スペースを犠牲にして速さと曲がりやすさを優先にしたというわけです。

38 使節船復元の手がかりー「伊達治家記録」

宝田さんののちに回顧談のなかで、設計の依頼を受けて最初にやったのは、「治家記録」の寸法の解釈からだったと述べています。図2にあげたように、船の長さには7種類もありました。「治家記録」に「長サ十八間」とある数字を、どれに当てはめるかによって船体の規模が大きく変わってしまうのです。単純に、これにしようかと思いましたが、

た。悩み苦しみながらデータを積み上げて、図1の設計図ができたのです。

400年前に西洋の技術を吸収して日本で造られた帆船です。日本の記録とヨーロッパの記録を突き合わせ、復元された帆船です。イギリス型でもスペイン型でもない伊達ガレオンと呼ぶことにしたこのことでした。絶妙なネーミングだと思っています。

ところで船型ですが、スペイン型は船の腹(船体)が大きく

た。悩み苦しみながらデータを積み上げて、図1の設計図ができたのです。

宝田直之助氏

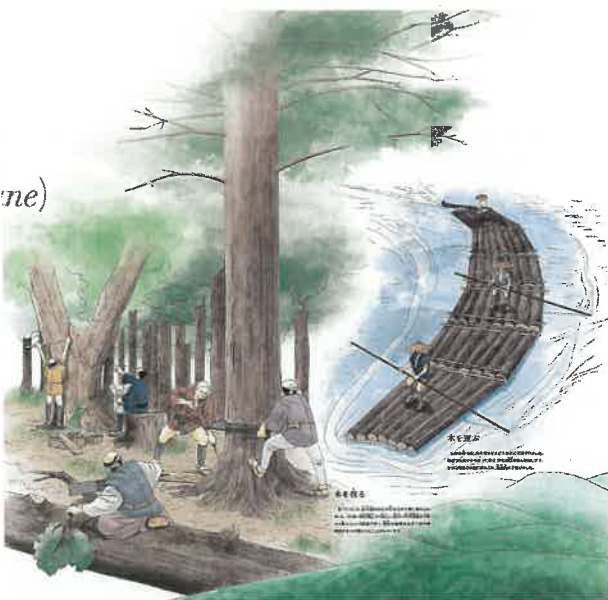


宝田直之助氏は、宮城県立美術館館長を務める。今回の記事では、伊達政宗の黒船「伊達ガレオン」の復元について、宝田氏の設計図と船の長さの定義について解説している。

船材の調達

「真山記」には、船材の調達地も書いてありました。「杉板八気仙・東山」「曲木」は「片浜・西岩井・江刺」から調達したとあります。杉板は、船側の板張や甲板用に用いられました。曲木とは肋骨用の湾曲した角材のことです。

図4 船材の伐り出しと筏流し(サンファン館展示イラスト)



たのでしよう。片浜はわかりませんが、これらの地域はのちに藩有林(御林)が多く設定されています。早くから林業が盛んだっただけではなく他所からも種々の船材が供給されたのでしよう。

気仙地方からは海運で、内陸部からは陸路や北上川を利用して運んだのでしよう。江刺では人首川と広瀬川が北上川に流れ込み、西磐井では衣川や磐井川がつながっています。東山には北上川の支流の砂鉄川があります。砂鉄川では江戸時代から大正時代まで、伐り出した木材を筏(いかだ)に組んで北上川へ運ぶ木流しが行われていました(図4)。



図3 船材の調達地

図3 船材の調達地

図1 復元船の設計図

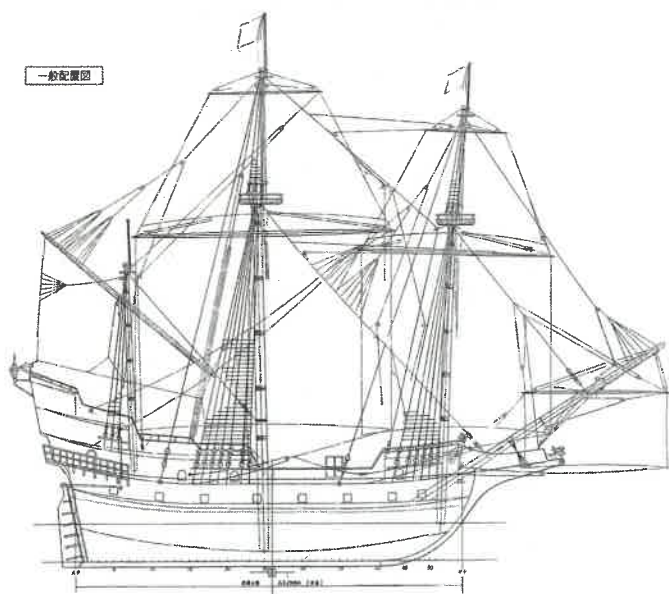


図2 船の長さの定義図

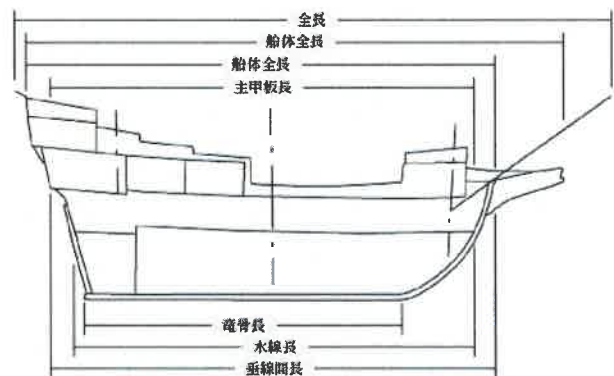


図 船の長さの定義(出典:宝田直之助氏)

「真山記」には、船材の調達地も書いてありました。「杉板八気仙・東山」「曲木」は「片浜・西岩井・江刺」から調達したとあります。杉板は、船側の板張や甲板用に用いられました。曲木とは肋骨用の湾曲した角材のことです。

筆者略歴
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。3代目のサン・ファン館館長に就任した。



東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26〜31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。